

三浦梅園の手紙(下)

—麻田剛立宛—

酒 井 シ ヅ

四、三浦梅園と麻田剛立

小川鼎三先生が三浦梅園と麻田剛立に興味を強く抱かれたのに二人とも同郷であったことが大きく影響していた。梅園は豊後国東の富永村に生れ、麻田剛立は先生の生地と同じ豊後杵築に生れた。先生はしばしば中学時代の恩師について語られたが、中でも杵築中学在学時代の校長藤井専随先生へは心底から尊敬しておられた。藤井専随校長の編著『梅園全集』上下巻が出版されたのは大正元年(一九一二)である。その翌年に先生は中学に入学された。おそらく藤井校長から郷土の偉人三浦梅園について聞かされるが多かったに違いない。

また、先生のお宅には父君が給料のほとんどをばたいて購入したと言ひ伝えのある梅園の詩がある。おそらく梅園は先生を最初に惹きつけた郷土の偉人であったであろう。そしてまた、最後まで三浦梅園であったとは、偶然とはいえ、何か因縁を感じざるを得ない。

三浦梅園は享保八年(一七三三)の生れであるが、それより十一年後の享保十九年(一七三四)に麻田剛立が杵築藩監郡の綾部綱斎の第四子に生れた。三四歳で杵築藩医となったが、星学に専心せんとして脱藩して、大坂に逃れて、姓を麻田

に替えた。安永一年（一七七二）のことである。時に三九歳であった。

大坂での剛立は懷徳書院の中井竹山、履軒兄弟ときわめて親しい関係にあった。特に履軒は剛立と日常生活は無論のこと、学問の面でも深く付合っていた。昭和二十二年、その証拠の一つを小川先生が見つけて、中井履軒の『越狙弄筆』の序文に出てくる「豊国麻子」が豊後国麻田剛立であることを指摘されたのである。⁽²⁾⁽³⁾そこで安永二年、解体新書出版の前年書かれた『越狙弄筆』は、麻田剛立が行った解剖の所見を中井履軒が書き留めたものであることが明らかになったのである。

三浦梅園の『造物余譚』もまた、小川先生によって明らかにされた所が⁽³⁾⁽⁴⁾多かつた。

五、手紙の内容

1 書かれた年の同定

この手紙は大坂に住む麻田剛立にあてて、豊後国国東半島の両子山の麓、富永村（大分県国東郡安岐町富永）に住む三浦梅園が出した書翰である。

手紙には「四月十八日」と日付があるが、その年は本文中に、

「拙者も当三月十五日從_ニ木下左衛門尉様_ニ不_ニ存寄_ニ麻地酒一樽御恩賜難_レ有奉_レ存」とあることから安永四年と推定した。つまり、梅園の年譜の安永四年（一七七五）の項に「この年三月十五日日出侯に謁し麻池酒を賜はる詩あり」と記す。手紙でも同じ月日に梅園が木下侯から麻地酒を貰ったことを記す。

『梅園詩集』に載る安永四年に作った詩の中に「日出侯賜_レ酒」と題する詩が載る。⁽⁵⁾

2 麻田剛立の家族

安永四年は梅園が五三歳であり、剛立が四二歳であった。剛立が大坂に出て三年目の年である。

手紙では、まず、剛立の近況を尋ねている。

「春時御持恙御発不_レ被_レ成 夏をも御迎被_レ成候哉承度奉_レ存候」

剛立が春に持病が出ることなく夏を迎えたかというのは、剛立に持病があったことを物語る。次に

「拙者も此間御城下へ罷出候 御両家様御安健被_レ成御坐候 被_レ動_ニ貴念_ニ間敷候」

とあり、梅園が杵築の城下へ出かけたこと、御両家とも変わりがいいから心配はいらないと記す。御両家が何処であるかはこれからだけでは解らないが、脱藩した剛立にとって気掛りになるのは郷里杵築に住む身内のことであろう。

麻田剛立の父綾部綱斎は寛延三年（一七五〇）に亡くなり、この年はすでにいない。家督は長兄妥胤（字が伊承）が継いでいた。伊承は梅園より四歳年長であり、梅園が綱斎に師事した元文四年（一七三九）から交友関係にあった。それは妥胤が天明二年（一七八二）に亡くなるまで続き、亡くなった時に梅園は「本藩監郡綾伊承君諡議」なる詩文を作った。

おそらく梅園は、城下、即ち、杵築に出たとき、伊承を必ず訪ねたであろう。

3 中井竹山・履軒兄弟と梅園の交流

「先達而は以_ニ御紹介_ニ中井先生_ニ文通_ニ忝奉_レ存候 其後早速御両所様共に書状指上申度奉_レ存候処 近親病人有_レ之 終快復不_レ仕彼是奉_レ失_ニ本意_ニ御寛恕 猶又中井君にも可_レ然奉_レ頼候 中井君より不_ニ存寄_ニ両品御嘉贈御厚志過分之至何分御序宜敷御挨拶可_レ被_レ下候」

とある。ここに梅園と中井竹山・履軒の兄弟との関係を知る重要な記述をみる。すでに二人と梅園の交友があったことは知られていたが、いつ知り合ったかはこれまで分らなかつた。この手紙にそれを解く鍵がある。

手紙には「中井先生」と「中井君」を書き分けている。中井先生が兄竹山（一七三〇～一八〇四）であって、中井君を弟履軒（一七三三～一八一七）であるときみならず、先の文面では梅園が剛立の紹介で文通を遂げたのは中井竹山となり、安永四年（一七七五）この年にお互いに知り合ったことになる。

一方、中井君を履軒とすると、履軒から贈り物があつたことを知る。これと符合する手紙が小野精一著『三浦梅園書簡集』に載る。中井徳二から梅園に宛てた手紙である。その手紙をここに転載する。

「四月十九日の高教辱く拜読仕候 先以絳帷益御清勝珍重奉存候 客年菲薄の品差上候処御丁寧御謝辞不堪慚懼候 先頃綾宰君御上都 度々得接清晤 毎度御尊承申候 無程歌馳駒可申候 此地の事お序御聞可被下候 暑中諸事懶廢 尊答甚及延引候 此段被教海容候 於当地御用之義御座候節者 無御隔意可被仰下候 隨身相応の義ニ御座候は、斡旋可仕候 秋暑尚烈 萬自重 恐惶謹言

八月十一日

中井徳二(花押)

三浦安貞様

この手紙で小野精一は中井徳二を竹山としたが、徳二は履軒のことである。従つて、履軒がこの手紙の中で

「四月十九日の……客年菲薄の品差上候処御丁寧御謝辞不堪慚懼候」というのは、梅園の剛立宛の手紙で「中井君より不存寄両品御嘉贈御厚志過分之至……」と感謝し、ついで「乍延引中井君へ書状又々指上候」という記事と符合する。梅園は剛立に宛てて手紙を書いた翌日、即ち、四月十九日に履軒へも手紙を書いた。これを肯定すると、履軒の手紙に客年、贈物をしたとあることから、梅園と履軒は安永四年の一年前にはすでに知り合つていたことになる。

また、梅園の剛立宛の手紙には、「中井君」と記す文面は前記のもの他に次のものがある。

「中井君詩も御好被成候哉 強而御好不被成候哉 若御好被成候も折節御吟咏も御坐候は御中間に御書付御見せ可被下候 且御同人様へ初相識謝意奉存候 左ニ申段御序に御聞可被下候」(……は筆者加筆)

この文面で中井君を履軒とすると、梅園は履軒が詩作を好むか否かを尋ねている。まだ履軒とそれほど親しくないとはいえる。すると、梅園が知り合つたのは、八月十一日付の履軒の手紙で推測した安永三年(一七七四)であつたとするのが妥当だと思ふ。

4 孝女初女、浄国寺の件

手紙には

「中井氏初女孝状従姉子様 相達落手 以御深志 彼者之孝終始不朽之事欣幸不_レ過_レ之候 乍_レ不_レ存御文章筆力驚入奉_レ存候」と初女について記す。「初女孝状」とはいまでも杵築の孝子として知られる人物であり、三浦梅園の『愉婉録』に載る。本書は梅園が子女教訓のため三八名の忠臣、孝女、貞婦などを選んで編集した本であり、天明三年（一七八三）に脱稿したものである。初女についてはその下巻に「紺屋町はつ」と題して、その孝状を詳しく記す。その文中に中井竹山とこの孝女の関わりについて次のように記す。

「郡監綾部^{ヤシタ}妥胤華名文右衛門ははつが久しくつかへし主人なり 妥胤安永丙甲の冬 国の事有て大坂にゆかれしに 大坂学校懐徳堂の教授中井竹山先生よりかの初女に贈物有て其事を嘉しられたり それを謝するるとて初手拭ひとつ妥胤の便に託してかの先生に遣しける 先生孝子の贈物とて大に悦 明て正月廿日其家の節会とて親族旧識門人など百數十人集り 文よみ 詩作り 酒などたうべて遊ぶことなりしに 其日の手水場には山城なる川島村儀兵衛が家の竹にて手拭かけを作り かのてのぐひに自ら豊後杵築孝女初手製と書てかけたり 妥胤も其日の賓に預れり 竹山衆賓を揖し、かの脱架をしめし 是みな孝子の贈物なり 殊にけふの賓妥胤は孝子のみやづかへし主人なり いざよりてまのあたり其孝状を聞給へと有しかば 満堂の衆賓まど居してこれをきき皆嘆称せしはまた孝女の榮にあらずや……」

ここで記す綾部妥胤（伊承）が大坂に出た年、安永丙申は五年である。従って、梅園の剛立に宛てて出した手紙の翌年になる。

また、先に引用した八月十一日付の梅園宛の履軒の手紙に「先頃綾宰君（綾部妥胤）御上都 度々得接清晤 毎度御尊承申候……」とあり、綾部妥胤が安永四年にも大坂に行ったことを記す。梅園の手紙に「中井氏初女孝状従姉子様相達落手……」ということを合せ考えると、初女の孝状を知った中井竹山が安永四年それを文章に作り、また初女の主人綾部妥

胤に初女への贈物を託したので、それに感謝した初女が、安永五年の冬、大坂に行く主人に中井竹山へと手拭を託した。竹山はその手拭に「豊後杵築孝女初手製」と書いて、翌六年正月に竹山の宅に集った客に披露したとなる。

現在の杵築市の城趾に「孝女初」の碑が建つ。

梅園の剛立宛の手紙には「姉子様御物語にて承候へは和吉心底ちと拙者書付上候とは相違も御座候趣にも……且又和吉宅に帰申候後 老婆やとひ初女を宅に置時分へ他家ニ宿し 合登に到候事ミへ不申候……」とある。

和吉とは初の夫となる人物である。竹山がひどく感心した孝女初とは、七歳か八歳で病身の老母を養うために行商し、十歳で機を織り、他人の着物を縫って葉代をかせぎ、孝を尽した。その孝状が君公の知るところとなり、十六歳のときに恩賞を受けた。母の亡きあと、定七に息子和吉の嫁にと望まれたが、和吉は放蕩の限りを尽し、家にも寄りつかなかった。明和五年、定七は病に倒れ、寝た切りになったが、初は親と同様に仕え、亡くなると法事一切をとどこおりなく済ませ、宮仕えの身となったが、安永三年七月、和吉が郷里に戻り、悔い改め、初に詫び、その年の暮、人のはからひで和吉と初は結婚し、仲むつまじい生活を送ったという話である。

『愉婉録』にはこの手紙文と同様に

「和吉その身はちなみのかたに宿し、其宅に初を置き 老女やとひ、すまさせ 人取結びすすめけれどもはるばるの道かへるは親追薦の為なるぞ それを置いていかで身を置いていかで 身をやすくする營すべきとて昼は通ひて家の取つころひし 夜はちなみの方に帰り仏事つとめ……」

と、和吉が無頼の身を改め家業を立て直そうと心してからのことを記す。

手紙はさらに安岐国浄国寺の事件について「安岐浄国寺 往昔 長昌寺と公訴の節 遠嶋之師 其弟子の僧以孝心 師の僧得赦而帰候一件とくより吟味仕候得とも委細わかり不申候」と記す。この話は『愉婉録』上巻の最初に載る。この話の概要は次の通りである。

安岐の浄国寺の六世卓誉という人が、安岐と杵築の間の地、守江にある潮音庵の所屬を巡って杵築の長昌寺と争った。結局、卓誉に非があると決り、卓誉は八丈島に流された。それを弟子卓栄は悲しみ、幕府に師を帰して呉れと日参したが、それが十六年も続き、ついに幕府は決定をくつがえして、卓誉を許したという。卓栄はその後、下総古河の十念寺を与えられ、その中興の祖となり、享保六年（一七二一）に亡くなったという。手紙でその詳細はわからないとあるが、『愉婉録』ではこの事件を詳しく述べる。『愉婉録』二巻は天明八年（一七八三）に脱稿している。この手紙の後で詳細について知り得たのであろう。

5 梅園の家族

梅園の手紙にはこの年の春、近親に不幸があったことを記す。

「梅園詩稿」の安永四年の作品に「三年晦日舅氏宅」と題する次の詩がある。⁽⁸⁾

「地下人間路不同。空追胡蝶送東風。鳥啼花散春如夢。無限傷心落照中。」

梅園の伝記では妻についての記述が少ない。梅園は三度、妻を娶ったが、この時の妻は寺島氏、つな女である。従って、この近親の不幸は寺島家のことであろう。つなは梅園の遺言書に玉樹と記す人物であるが、天明三年（一七八三）梅園より六年前に亡くなっている。

6 梅園の著作と手紙との関係

梅園の代表的な著書は『玄語』『贅語』『敢語』の三部作であるが、この手紙が書かれた安永四年は三書ともいちおうの完成をみて『敢語』が出版に付された年でもあった。

梅園の思想は独創に豊み、難解なことで有名であるが、文字の読み方も独特なものがあつた。『梅園読法』は安永二年（一七七三）梅園塾の門人池部子昌のために作った音韻の本である。その中で不の字の読み方を論じている。⁽⁹⁾この手紙はそれから二年後、中井兄弟と知己になった機会に不の発音の疑問を匡したのであろう。

「不之字天下通し候て漢具をわかつ音フト読申候 不仁不庭不義などの類にて御座候。ズト読候処の不の字と音正音いつれに御座候や承度奉存候」と中井履軒に尋ねてくれと頼んでいる。

これについて梅園塾で再三論じたのであろう。『梅園読法』の巻末に門人長田俊卿が京都で竜野草廬にこの問題を質問して得た回答と今堀周左衛門の回答が加筆されている。その加筆は安永九年（一八八〇）にされたものである。

梅園は若い頃から詩作を行い、それは『独嘯集』（一七歳から二一歳までの作品一〇〇首）、『春遊草』（五九歳の時の紀行詩集二七首）、『梅園詩集』（二二歳から六四歳までの作品三七六首）、『詩園詩稿』（前記の著作に載るもの以外の詩稿を藤井專隨が年代順に並べたもの、九三〇首）にまとめられているが、この手紙によると「詩法去年少々考示申候」とある。しかし、これまでに明らかにされた梅園の事績には、安永三年にこの手紙に該当するものが見当たらない。

詩法を説いたものに『詩轍』（六巻）があるが、これが出版されたのは天明六年（一七八六）である。しかし、序文を日出藩文学喬維嶽が天明一年（一七八一）に作ったことを鑑みると、その稿を安永三年頃から書き起した可能性はある。

参考文献として「三家詩話 東人詩話 詩林広記 詩法入門 詩人玉屑 都玄敬詩話 詩藪 卮言」を持っていたことがこの手紙からわかる。

手紙ではこの他、阿蘭陀真図や西洋曆書について尋ねている。梅園が西洋天文、地理、医学の知識を剛立を介して得ていたことはすでに知られていることであるが、この手紙もそのことを示している。

六、まとめ

三浦梅園の麻田剛立宛の手紙を小川鼎三先生が亡くなる直前に入手された。本稿でこれが安永四年（一七七五）のものであること、この手紙から中井竹山、履軒と三浦梅園とが知り合った時期が安永三、四年であること、その仲介を麻田剛立がたったことを明らかにした。

また、梅園が『愉婉録』に載せた事例をこの時期から注目していたこと、詩法の著作に安永三年からかかっていたこと等、これまでの梅園の伝記に触れてないいくつかの点が明らかになった。

文献および参照

- (1) 「述志 并序」、梅園全集巻之之下六八八～九頁に全文が載るが、4ヶ所に誤植がある。
- (2) 小川鼎三 麻田剛立の事蹟 脳神経領域 一〇号 八五～九二頁 昭和二六年
- (3) 医学古典集『造物余譚』『越狙弄筆』解説 小川鼎三 昭和三三年
- (4) 小川鼎三 三浦梅園の「造物余譚」に就て日本医学史学雑誌 一三〇九号 二六七～二七八 昭和一七年
- (5) 『梅園全集』下巻 六七九頁 大正一年
- (6) 同右 二二四～二三三頁
- (7) 同右 一八一～一八六頁
- (8) 同右 七一〇頁
- (9) 同右 三四二～三四七頁

三浦梅園の手紙(上) 正誤表

三十一卷一号	三、手紙文	14	正	誤	思召し候様に御物語とも承候品…	所
一二七頁					…御慎言為成候	被
7	正	誤	御深志彼者之孝終托始			
9	正	誤	是等も早賤不学之人			
11	正	誤	遠嶋之時師			
5	正	誤	詩林広記 詩法入門			
2	正	誤	御坐候は			
11	正	誤	験始進上申仕候			
10	正	誤	すたり不申在中			
8	正	誤	任御心安御沙汰			
6	正	誤	都其敬…			
			詩話類之揚詩法			

A Letter of Baien Miura, a Philosopher-doctor

by
Shizu SAKAI

Baien Miura (1713-89) was a very excellent philosopher and physician. He was born in Tominaga, near Kitsuki city of Ooita prefecture and spent most of his life there. He studied medicine and philosophy by himself. However, he had relations with many friends by letters. Recently I found a letter which nobody noticed.

This letter was written to Goryu Asada, who was born in Kitsuki and lived in Osaka. Miura was used to ask him many questions on anatomy and astronomy. In this letter he asked some questions on astronomy. Moreover, this letter showed who and when made Miura acquainted with Nakai's brothers, who were famous philosophers and gave a great influence on him.

This letter was written on 14th of April without year. As the result of my research of the content of this letter and the related records, it was declared that Miura was introduced to Nakai by Asada in 1774.